



TITLE:

# 東亞新秩序建設と新國民政府の發展性

AUTHOR(S):

矢野, 仁一

---

CITATION:

矢野, 仁一. 東亞新秩序建設と新國民政府の發展性. 經濟論叢 1940, 51(2): 166-186

ISSUE DATE:

1940-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/131428>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 經濟論叢

號二第卷一十五第

月八年五十和昭

哀辭

故財部教授遺影署名及原稿

## 論叢

支那の農家負債と農地の抵押……………經濟學博士 八木芳之助  
水産資源の保全について……………經濟學博士 蜷川虎三

## 時論

東亞新秩序建設と新國民政府<sub>の發展性</sub>……………文學博士 矢野仁一

## 研究

民國初期の兌換券……………經濟學士 徳永清行  
自由貿易主義の吟味……………經濟學士 岡倉伯士

## 記事

財部教授逝く

故財部教授年譜及著書論文目錄

## 追憶文

神戸正雄 本庄榮治郎 蜷川虎三  
木村喜一郎 吳文炳 宗藤圭三  
青盛和雄 松岡孝兒 石川興二  
黒正巖 藤本幸太郎 谷口吉彦  
岡崎文規

## 附錄

## 彙報

外國雜誌論題

## 時

## 論

## 東亞新秩序建設と新國民政府の發展性

矢野 仁一

一

今世界は未曾有の變局に當面してゐる。歐羅巴において獨この勢力のめざましき展開によつてウエルサイエ體制、英佛本位の舊秩序は崩壊し、獨伊本位の新秩序によつて代置せられんとしてゐる。それは東亞においても英佛勢力の減退となつてあらはるゝことも想像せらるゝことである。歐米諸國の勢力によつて支持せらるゝ、或はこれを背景とする東亞の舊秩序を打破し、東亞人民の利益幸福を第一とする東亞本位の新秩序を建設せんとして努力奮闘しつゝあるわが國として誠に千載の機會であるやうに思はれるが、この英佛勢力の減退がわが國の手によつてなされずして専ら獨の手によつてなされし結果として、蘭領印度或は佛領印度支那における新歐洲勢力の出現となり、また蘇米の援蔣政策の加強となるやうでは、折角の機會も徒爾とならぬか。これは仇怨は解くべく結ぶべからずと稱し、善隣友好の近衛聲明に呼應し、和平救國を標榜して成立したる汪兆銘の新國民政府を支援扶掖して一日も速かに名實共に眞の支那統一政府たるに至らしむることは、わが國として何ものにも換え難き目

前の急務たる所以である。

新國民政府の統治に歸すべき地域は、皇軍の占領區域に限定せらるゝ現状において、今度の漢水東西岸における大殲滅戰、宜昌一帯地方の掃蕩戰等の結果、次第にその範圍を擴大するやうになつてゐるものの、なほ英、佛米、蘇等の歐米勢力に依存して抗日建國の迷夢をさまたない蒋介石政權の統治下に殘存してゐる地域と比較し、面積において決して廣いとはいはれない。河北、山東、安徽、江蘇、察哈爾五省などは、なほ重慶政府や共產黨によつて指使され、所在に嘯聚蠢動し、ゲリラ戰を展開してゐる敗殘兵や共匪群は數十百萬を以て算せらるゝ有様であるが、先づ大體全省域はその統治地域に屬してゐるといつてよい。山西、綏遠、河南、湖北四省も大部分はその統治地域に屬してゐる省である。しかし浙江、江西、湖南、廣東、廣西、福建六省のごときはその統治地域に屬する地方は僅かにそれらの省域の一部分に過ぎない。これに反して四川、雲南、貴州、青海、西康五省の外、蘇聯の勢力下乃至延安の共產政府の勢力下にある新疆、陝西、甘肅、寧夏四省合せて九省は省域の全部、浙江、江西、湖南、廣東、廣西、福建六省は省域の大部分、山西、綏遠、河南、湖北四省は一部分重慶政權の統治地域であり、それに四川、新疆二省のごときは一省で數省の面積を有してゐるから、面積でいへば新國民政府の統治地域はおそらく重慶政權の統治地域の三分の一乃至四分の一にも及ばないのではないか。勿論人口の密度だとか、地味の肥瘠だとか、人文經濟等の發達の程度、土地の開發、商工業の發達、水運の利便、港灣の設備、交通金融等の機關の整備等の點においては、新國民政府の統治地域の方は遙かに優つてをり、重慶政權の統治地域の遠く及ぶところでないが、ともかく面積においては重慶の方は比較にならぬほど廣い。それ故もし新國民政府

の統治地域は現在の範圍に止まつて、重慶政權の統治地域に發展することができないとすれば、和平救國は望まれない。東亞新秩序建設も晝餅に過ぎない。わが國としても抗日政權を徹底的に壊滅せしめなければならぬわけであるから、消耗戦をはてしなく続けなければならないことになる。

## 二

昭和十年頃であつたと思ふが、有名な徐樹錚の子徐道鄰が、外交評論といふ支那の雜誌に、日本は敵か友かといふ長文の論説を掲載し、日本が支那に對して開戦しても日本の思ふやうには容易に支那を壊滅せしむることはできないと論じたことがある。この場合に支那の兵力は劣弱で到底日本と比較はできないから、支那は必ず大なる打撃を受けるに定まつてゐる、しかし勢力の均等な國家間の戦争であれば決戦で戦争を終結することはできやうが、日本と支那とのごとき兵力の絶對不均等な國家間の戦争は決戦では戦争を終結することはできない、日本は支那の最後の一方里も残さぬほど占領し、徹底的に支那を消滅してしまはなければ戦争は終結しないといふのである。かれはこれを説明し、兩國開戦の際に敵國の政治中心を占領することは作戦の目標となるものであるが、支那に對する作戦の場合には、その首都を占領してもそれによつて支那の死命を制することはできない、普通の固定した組織を持つた國家であれば、土地、人民、主權或は政府といふものは國の要素であるが、支那は革命期中の未完成の國で普通の固定した組織を持つた國でないから、土地、人民、主權或は政府は要素でなく、要素は主義、領袖、群衆であつて、主義は普遍し、領袖の健全な存在を群衆が一致して擁護するといふことになつてゐれば、一時の政府の成敗とか、土地の得喪などは第二次的問題である、それ故日本はたとひ支那の首都を占

領したところで支那の死命を制することはできない、もしその領袖を討滅し得ないとすれば、領袖の居るところはすなはち支那の政府、支那の國力の中心の存するところである、日本人は軍事行動を續けさへすれば、支那の領土は漸次蹙り、支那はつひに國家的生存ができなくなるであらうと考へてゐるやうであるが、それは革命未完成的の國家は尋常普通の國家と同一視することができないといふことを知らない謬見に過ぎない、領袖が依然として存する間は、日本は決して支那を徹底的に壊滅することはできない、日本は支那の交通便利な若干の都市、若干の重要海港を占領するであらうが、四千五百萬支那方里の支那全土を占領し盡すことは斷じてできない、支那の重要都市と海港とが全部占領せられた時、支那は極度の困難に陥ることは明かであるが、しかし決して支那の死命を制するには至らないといふ議論を述べてゐるのである。

支那は普通の固定した組織を持たない所謂革命未完成の國であつても、從來は四千五百萬方里の最後の一方里までも占領し盡さなくとも、支那の死命を制することはできた。戦によつて三分の一ぐらゐを占領すれば、大勢が定まり残りの三分の二は戦はずして屈服せしむることはできた。しかるに今日の支那は徐道鄰のいつてゐるやうに三民主義か抗日主義か主義が普通し、衆心堅結してこの主義を代表して人民を指導してゐる蔣介石といふ領袖を擁護するといふことになつてゐるためであらうか、どうも日本は支那の寸地尺土と雖も實際に戦争によつて占領しなければ占領できないやうな有様がある。これではまさか支那の四千五百萬方里の最後の一方里までも占領しなければならぬことはないとしても、徹底的に蔣介石の抗日政權を壊滅するといふことは實に容易でないやうに思はれる。わが國としては長期戦の覺悟は必要であらうが、今日米、蘇、英、佛等が或は武器彈藥その

他の軍需品の提供輸送により或は借款の提供により重慶抗日政權に對し執拗に援助の意を持續してゐるのは、これによつて現に重慶政府が日本のために重要都市や海港のほとんど全部を占領されたために陥ることになつた極度の當面の困難を一時的に救済すれば、日本は戦争を續けても、いつまでもこれを徹底的に壊滅することはできず、日本はみづから國力を消耗するに過ぎないといふ考へに出でゐることは明かである。かくては日本もかれらの思ふ壺にはまりて國力の消耗を免れないであらうが、支那は一層國力の衰殘を招き、永く歐米勢力の羈厄を免れないことになるであらう。汪兆銘が支那と日本とは存亡安危兩つながら相關聯してゐる、日本なければ支那なし、支那なければ日本なしといふ孫文の遺教を提げ、和平救國のため善隣友好の近衛聲明に呼應して驟起した所以であり、わが國がどこまでもこれを支援して重慶政權の諸重要分子を吸収統合して速かに名實共に全支那の統一政府たらしめざるべからざる所以である。

### 三

新國民政府が今後發展して重慶政權の統治地域を併合統一し、名實共に完全なる支那の統一中央政府となることは、わが國と共に東亞新秩序の建設、東亞永遠の平和の責任を分擔しなければならぬ以上絶対に必要である。今後の發展性如何といふことは、新國民政府の生命といつてもよいほど大切な點である。汪兆銘が新國民政府の成立前において屢々成立の時期は問題でない、問題はその條件であるといつたのも、條件が支那の獨立自主、自由平等を阻害するやうなものであつては、たとひ早く成立しても、重慶側から漢奸である、偽政府である、日本の傀儡であるといはれても辯解ができないことになり、これでは和平救國といつたところで、支那全國

の民心を把握することはできず、今後の發展は望まれないからである。わが國としてもせつかく汪兆銘を擁護し、新國民政府の育成に助力してもそれでは意味をなさない。わが國としてはさうかといつて重慶側に新國民政府が日本の傀儡であるといふやうな口實を少しでも與へないために、この際濟し崩し的でなく一舉にわが國の一切の對支工作を思ひきつて撤廢し、即時撤兵を實行するといふこともできない。さういふことまでもしてその結果、重慶政府側も抗日建國の迷夢をさまし、親日建國に轉向し、新國民政府に合流し、わが國と共に東亞新秩序の建設、東亞永遠の和平實現の責任を分擔するといふことになれば、今度の事變の特殊の意義からしてそれでも結構と考へてよいかも知れないが、かへつてそれ見たことか、日本は到底戰爭を續けることができないため退却したのでないかといつて益々抗日精神を強くし抗戰建國の意志を強くせしむるに至る危険なしとしない。さういふことにでもなればなんのための戰爭かわからなくなる。これだけの犠牲を敢てし、國力を傾け民命を賭して振古未曾有の大戰爭をなした意義は全くなくなるわけだから、さういふ冒險もできないであらう。それでわが國は領土の割讓を要求しない、賠償金も要求しないといつて、善隣友好、共同防共、經濟提携といふ所謂近衛三原則に違反しないやうにして、その範圍内において滿洲國の承認だとか、蒙疆及び北支の若干の特殊性の承認だとか、駐兵、經濟等に關する若干條件の承認だとか最少限度の要求條件を提出することに止めたのである。

それですらこれまでわたくし共はわが國に對して相當に理解があり、新國民政府の樹立にも關係があるやうに思つてゐた所謂知日派の高宗武や陶希聖らはこれを不満として、一月初旬汪兆銘の和平建國陣營から香港に脱走し、香港大公報紙上、日本の提出條件は民國四年の二十一ヶ條よりさらに一層苛酷なるものであり、所謂近衛聲



明とも全然性質を異にするもので、支那を屬國視し、支那の死命を制せんとする誠に忍ぶ能はざる屈辱的條件であるにかゝはらず、汪先生は日本軍部の強要或は甘言に乗ぜられて、遂に昨年十二月三十日にこれを承認してしまつた、ここにいたつてわれら兩人は國家存亡の危機正に到來したことを痛感し、意を決して交渉内容の寫を携へて香港に脱出したのであるといふ公開狀を發表するにいたつた。

## 四

蔣介石はこの高宗武、陶希聖兩人より發送した所謂交渉内容の寫であるといふ日支關係調整要綱及び汪兆銘が日本側に提出したといふ新國民政府成立の必要條件ならびに日本側のこれに對する回答といふものを讀んだといふことで、全國軍民に告ぐる書を發表し、その中に、日支關係調整要綱には、近衛聲明の東亞新秩序の一字一句がすべて具體化されてゐる、二十一ヶ條に比して十倍も兇惡、朝鮮滅亡の手段に比しさらに惡辣である、多少血氣あり靈性ある黃帝の子孫たる中華國民は、これを讀んだならば必ずや怒髮天を衝き<sup>ツナグ</sup>皆が裂けるであらう、かれ日本が好んで唱へる善隣友好、共同防共、經濟提携ははたして支那の獨立と生存とを害せざるか、善隣友好は日支合併でないか、共同防共は永久駐兵でないか、經濟提携は經濟獨占でないか、これは近衛聲明中に希望してゐるところであり、汪が將に成立せしめんとする更生支那すなはち奴隸的支那の要綱なのだ、日本の所謂新秩序建設の職責を分擔するといふのは、支那自身の解體の任務を分擔するものでないか、日滿支互助連環の關係、東亞協同體成立の日こそ支那の獨立國家消滅の時である、北支および蒙疆を以て國防上經濟上強度の結合地帶となし、特に蒙古には軍事、政治の特別地位を設立するといふことだが、一體國防とは誰の國防なのか、支那の領土の上

で日本の國防のために強度の結合をなし、特殊地位を設定するといふやうな支那がはたして獨立の國家といへるか、また新國民政府は滿洲帝國を承認し、その後で日滿兩國で支那の領土主權を尊重するといふが、滿洲國を承認してなんの支那の領土主權の尊重があるか、しかも支那の領土と主權とを割いてできた滿洲國が支那の領土主權を尊重するのは滑稽でもあり、人を侮辱したものである、經濟提携、互助連環、經濟結合といふも、支那の經濟を掠奪し、支那の財政經濟政策から、關稅および海關制度の建立まで、すべて日本の支配を受け、制限を受け、統制を受ける、資源の開發および利用に關し、北支および内蒙では日本に特殊の便宜を與へ、その他の地域では特定資源にかぎり日本に所要の便宜を與へる、全支那の航空、北支の鐵道、日支間および支那沿岸の海運、揚子江の水運および北支と揚子江下流との通信等について協力する、日本は支那の一切の利權を擧げてこれを洗ひ凌ひ攫盡し、支那人民の衣、食、住、行すべて日本の支配を受けることになる、二十一ヶ條に比し範圍の廣大にして惡辣なること幾倍なるを知らず、しかも汪は欣然この未來永劫恢復すべからざる賣國契約に調印した、はたしてこれは和平なのか、亡國でないのか、國交調整なのか、亡國條件なのか、この條件の實行により支那の獨立自由は確保されるのか、それとも永久支那を賣盡すのかなどと、口を極めて非難罵詈を浴せてゐるのである。

汪兆銘としてはかういふ重慶政府側の非難罵詈に對して敢然として辯明し得るだけの條件の承諾を日本から得なければならなかつたわけである。經濟掠奪條件でない、賣國契約でない、それどころか經濟建設條件である、愛國的救國契約であるといふだけの自信を持たなければ新政府を樹立することができなかつたわけである。わが國當局者の苦衷もさることながら、汪兆銘の苦衷も想像にあまりある。これかれが新政府成立の時期は問題でな

い、問題は條件であるといった所以である。これはまたかれが三民主義國民政府の法統 (legitimacy) について執拗に争つた所以でもある。

## 五

重慶政府は汪兆銘の新國民政府を偽政府だといつてゐる。汪兆銘としては新國民政府は偽政府でない、重慶政府こそは三民主義を殘害し、共產主義と苟合したもので、この共產主義との苟合と共にみづから國民政府の法統を斷絶したものである。純正三民主義を繼承した新國民政府こそは眞の國民政府の法統を繼承したものであるといふ立場を確保しなければならなかつたことは當然である。

わが國において三民主義を容認することについて反對する論者も少くない。孫文の三民主義に關する諸論講を通讀してみると、民權主義、民生主義の理論において、わが國の皇道や、儒教の王道の道德的精神に背馳するやうな點あることは、しばらくこれを問はないとしても、民族主義の説明において、わが國の大陸政策を歐米諸國同様の帝國主義、侵略主義の政策として攻難してゐるやうに見える議論も少くない。

中國人は常に中國の人口は多く容易に人に消滅せらるゝやうなことではないと自誇してゐる、元朝が中國を征服した後、蒙古民族が中國を消滅することができなかつたのみならず、かへつて中國人に同化せられ、中國がたゞ亡びないばかりでなく、かへつて蒙古人を吸収したやうなこと、滿洲人が中國を征服し中國を統治すること二百六十餘年にして中國人を消滅しないばかりか、かへつて漢族に同化せられ、漢人となつてしまひ、現在多數の滿人はすべて漢姓を稱してゐるやうなことは、それは中國の人口が比較にならぬほど多かつたからで、今日も數多



かさないとしても、もしはたして手を動かさんとすれば、いつでも中國を亡すことができる、日本の動員の日から中國に對して攻撃を開始するまで多くても十日しかかゝらぬ、もし日本と絶交すれば、日本は十日以内に中國を亡すことができる、米國は一ヶ月後、英佛は多くて二ヶ月以内に中國を亡すことができる、軍事上の壓迫だけについていつても、世界のいかなる一強國でも十日乃至二ヶ月内ですべて中國を亡すことができるのであるが、もし外交上英佛米日等の諸國が妥協的方法を用ひて中國を亡さんとせば、兵力では十日や二ヶ月を要するものも、わづかに一朝にして足りる、各國の外交官が一室に會して一張の紙と一枝の筆とを用ひ各人が一箇字を簽すればそれで中國を亡すことができる、これは一朝でできる、かつて波蘭は露、獨、奧三國に瞬間で瓜分されたのはよい先例であると論じ、日本を歐米諸國と共に強權壓迫的侵略國家の列に加へてゐる。經濟上の壓迫についても、孫文は、朝鮮は日本の殖民地、安南は佛國の殖民地、朝鮮人は日本の奴隸、安南人は佛國の奴隸である、中國人はやゝもすれば亡國奴の三字を以て朝鮮人、安南人を譏諷してゐるが、われら中國人自己の處ところの地位はその實朝鮮人、安南人より一層悲惨なものである、朝鮮、安南は一國の殖民地、朝鮮人、安南人は一國の奴隸であるが、中國は各國の殖民地、中國人は各國の奴隸である、一國の殖民地であれば、旱魃、水害等の天災の場合に、主人たる國家は撥款賑濟をなすことは當然の義務で、奴隸となつてゐる人民も、それは主人たる國の當然盡すべき任務であるやうに考へるのであるが、各國の奴隸たる中國にあつては、天災の場合にも各國は撥款賑濟を以て當然の義務とは考へず、たゞ中國内地に居留してゐる各國人が捐助を提唱し、災民を賑濟することがあるだけで、その場合にも中國人はこれを各國人の義務を盡したものと見ないで、各國の甚大な慈善であるごとく考

へて感謝してゐる、一國の奴隸たる朝鮮人、安南人の地位は各國の奴隸たる中國の地位に比してよほど高いといはなければならぬなどと述べ、こゝにも日本を引合ひに出してゐる。

孫文は中國民族の道德に比して頗る高尚なることを説き、蒙古人、滿洲人のため二度も國家の滅亡を招きたるも、民族はよく存在を全うしたるのみならず、よく外來民族を同化するだけの力量を有したる所以はこの高尚の道德を有したるによるとなし、中國人が一致聯合して一個の國族團體を造成すると共に、固有の高尚な舊道德を先づ恢復すべきことを論じ、かくて後固有の民族地位を恢復し得べしといひ、この固有の道德は忠孝、仁愛、信義、和平であると説き、信義を説明する一段において、信字一方面的の道德において、中國人は實に外國人に比して優つてゐることは、いかなる地方においても觀取することができる、商業交易上においても觀取することができる、中國人は交易の場合契約書などは作成しない、一片の口約（口頭一句話）をなせばそれが甚大の信用を有するのである、外國人が中國人と貨物取引の約束をなす場合、普通は合同（契約書）を立てることになつてゐるが、たとひ合同を立てなくとも、たゞ帳簿に記入するだけで事が済むのである、貨物受渡の時になつて貨物の價格が低落しこれを買取れば大損失を免れないことが明かであつても、中國人は約束通り引取る、決して拒絶しない、ところが日本人は中國人のやうに信義を重んじない、外國人が日本で商取引をなす場合、たとひ合同を立てても、日本人は必ずしも履行しない、合同を立てた時約定の貨物に對して一萬元を支拂ふべきことを約しても、貨物拂渡の時貨物の價格低落して五千元となつたとすれば、日本人は合同あるにかゝはらず、貨物を受取らない、合同を履行しないことが常である、したがつて外國人は日本人を法廷に告訴するといふことは絶えずある、東亞に居

住すること久しき外國人にして、中國人及び日本人と商取引をなすものは、すべて中國人を讚美して日本人を讚美しない、日本人は歐大戰において、協商國に参加して、獨と戰ふに至つたのは、英と同盟條約を結んだので信義を重んじ、國際條約を履行せんがためである、信義のために國家の權利を犠牲にしたものであるといふが、日本は中國と下ノ關係條約を結んだのでないか、この條約中最要の條件は朝鮮の獨立要求の條件でないか、これは日本のみづから發起して要求し、しかも兵力を以て脅迫して中國に承諾せしめた條件でないか、しかるに今これを食言して、これを合併した、英國に對しては國家の權利を犠牲にしても條約を履行し、中國に對しては、信義を守らず條約を履行しない、これは英國は強く、中國は弱いからで、これは強權を怕るゝもので、信義を守るものではない、中國は國力の頗る強盛な時代でも、かつて人の國家を完全に滅絶したといふことはない、從前朝鮮は名義上中國の藩屬であつたが、實際は一個獨立國家であつた、中國の強盛であつた數千年間、朝鮮は依然として獨立國として存続したるに反し、日本は強くなつてからわづかに二十年そこゝの間に朝鮮を滅してしまつた、これは日本の信義の中國に如かざる證據だと述べ、支那が朝鮮は藩屬であるが、その内治外交に對して支那は責任を取ることができないといつて、露の侵略吞滅にまかせるやうな態度を取つたため、日本は已むを得ず獨力で露の勢力を防がんとしたことから日清戰爭となつた事實、下ノ關係條約において、日本は支那をして朝鮮の獨立を承認せしめたるも、朝鮮は日清戰爭前、支那によつて日本に反對したごとく、日清戰爭後、露によつて日本に反對する有様で、獨立の實なく、かへつて東亞の禍源たるに過ぎなかつたことから合邦を承認せしむることになつた事實を公平に判斷することができず、あたかも日本は強權を以て信義を破り朝鮮を滅したものであるやうに論じてゐるのである。

孫文は日本は維新以前、國勢は頗る衰微し、その領土狹小、中國の四川一省の大きさに過ぎず、その人口も少く四川一省の多きに及ばず、外國の壓制的恥辱を受けてゐたのみならず、その文化も中國より學んだもので、中國に比較して頗る低かつたのであるが、しかるにわづかに數十年にして世界強國の一となつたのは、民族主義的精神ある上に、歐米の長處、歐米の文化を學んだからである、これが一つのよい模範だ（二個好榜樣、中國人の聰明才力は日本人に劣るものでない、われら中國人がこの後歐米を學ぶことになれば、それは日本人に比較してかへつて容易であらう、今後十年中國人は日本人のやうに心膽を碎いて民族的地位の恢復を圖る時、外國の人口増加から來る自然的壓迫や、政治的、經濟的壓迫及びこれに伴ふ一切の禍害を除き得るのみならず、國力の非常な發展を望むことができる、中國の人口は日本の十倍、領土は日本の三十倍、富源も日本に比して一層多い、それ故もし日本と同様の進歩發達を遂げるやうになれば、日本に比して十倍の國力を有することになる、その時こそは中國はかつて強權帝國主義から受けた壓迫の苦痛に顧み、弱小民族のため弱を濟ひ傾を扶け、帝國主義の消滅を圖らなければならぬ、中國の強大と隆盛とはひとり中國の民族的地位の恢復のためばかりでなく、實に世界を統一して一個大同の治となすために利益となるやうにならなければならぬ、歐風東漸して安南は佛に滅され、緬甸は英に滅され、朝鮮は日本に滅されたが、中國の強盛であつた數十年の間、これらの國は皆獨立を保持してゐた、中國は今後強盛とならばこれらの國をしてその民族的地位を恢復せしむる一大責任がある、これ中國の理想たる治國平天下であると結んでゐる。

## 六



わたくしはかつて徐道鄰の日本は敵か友かといふ論文を読んで、孫文はもし東亞に日本がなかつたならば、支那は諸外國の分利を受けるか、或は共同管理を受けるやうになつたであらうといつたといふこと、また日支兩國の關係は屏齒輔車の關係で、相依り相助くれば兩方利を得、敵對すれば共倒れとなるといつたといふことを知つた。昨年十一月汪兆銘が上海で發表した三民主義の理論と實際といふ論文にも、孫文が民國六年に中國存亡問題といふ論文を書き、日本と支那とは存亡安危<sup>フタツナガ</sup>兩ら相關聯してゐる、日本なければ支那なく、支那なければ日本なし、兩國百年の安きを謀るためには、その間にいさゝかも障害を存せしむべきでないといつたといふことが述べてある。かういふ孫文の日支利害關係論は孫文の三民主義の諸講論中にはどうも見當らない。わたくしは今この孫文の中國存亡問題といふ論文の入手方について、支那にある友人に依頼してゐる。徐道鄰が日本は敵か友かにおいて、孫文が東亞に日本がなかつたならば云々といつたと述べてゐるのも、或はこの中國存亡論によつたものかも知れぬ。しかしたとひ孫文は日本に對して中國存亡問題において表明してゐるやうな考へを抱持してゐたとしても、それは歐米諸國の強權的侵略主義勢力に對して日支兩國が特に親密にしなければならぬ、協力提携して防禦しなければならぬといふ考へではない。かれは中國存亡問題において支那が今日世界において友邦を求めんとすれば、日米以外に求むることはできないといつてゐることでもそれはわかる。支那の日本におけるや、種族を以ていへば兄弟の國であるといつて、同種の關係あることを認めながら、異種の米國に對して、支那の米國におけるや、政治を以て論すれば師弟の國であるなどといつて、日本以上に尊敬信頼の情を表明してゐるのである。かれは三民主義の講説において、歐洲大戰後世界の先覺者中、將來別種の國際戰爭を惹起することの免れざ

ることを知り、或はこれは黃色人種と白色人種との戦争のごとき一場の人種的戦争でないかと論ずるものもある、自分個人の考へでは、人種の戦争でない、自分は既往の大勢を觀察し、將來の潮流を察すれば、國際間の大戦は到底免れざるも、この種の戦争は不同種の間に起らずして、同種の間に起るものでないか、白種と白種とは互ひに相分れて戦ひ、また黄種と黄種とは互ひに相分れて戦ふのではないか、すなはち階級戦争で、被壓迫者と横暴者との戦、公理と強權との戦であらうと考へるといつてゐる。日支兩國が同種だからといつて、異種の歐米諸國の勢力に對して協力提携して防禦しなければならぬとか、文化を同じくしてゐるからこの文化を協同一致して保存し長養して世界の文化に貢獻しなければならぬとかいふやうな考へは孫文にはどうもなかつたやうに思はれる。これは蘇聯に對しては從前の帝政露西亞の侵略政略を非難してゐると反對に、これを王道主義の國であるといはんばかりに推崇してゐる。かれがかつて聯蘇容共政策を取り、今日重慶政府が抗日を目標として蘇聯と結援し、共產黨と提携を絶つことができない所以は、實に孫文の三民主義諸講説中に包含されてゐる對蘇對日本の考へに依據するところがあるからではないか。昭和十一年國民黨の元老胡漢民が「余總理に追隨して革命に従事すること三十年、三民主義は唯一の救國主義なることを確信する、目前の情勢を熟察するに、抗日に非ずんば民族主義を實現する能はず、共匪を肅清するに非ずんば民生主義を實現する能はず、尤も望むところはわが黨の忠實なる同志は、總理の遺教を奉じ、以て本黨救國の使命を完成せんことを」と遺言して死んだことは、今なほわれらの耳底に残つてゐる。孫文の三民主義諸講説中に表明されてゐるやうな日支兩國の關係は、今わが國が歐米諸國の侵略的勢力に對して東亞の解放を要求する戦争において、支那に對して求めんとする善隣友好、互助連環の關係とは

よほど縁遠きものゝやうにも思はれる。

## 七

それ故孫文の學說、殊にその三民主義學說は、わが國として三民主義すなはち大亞細亞主義である、蔣介石によつて汚濁歪曲された三民主義を淨化し、共產黨によつて迷路に陥入れしめられた國民政府を正路に撥回せしむればそれでよい、孫文の原三民主義すなはち純正三民主義に還元せしめさへすればそれで差支がないとして、安易に容認することはでき難いやうにも思はれる。しかしこれを容認しなければ、汪兆銘の新中央政府は國民政府の法統を繼承したことになる。所謂レジティマシーの問題である。國民政府の法統を繼承したことになるなければ、支那全國の民心を把握することはできない。今日三民主義は徐道鄰のいつてゐるやうに、その説の是非如何にかゝはらず全國に普遍せる主義となつてゐる。その説の内容を正確に理解してゐるものは極めて少いにして、舉國一致の主義となつてゐる。敢然としてこれに反對するものは極めて少い。殊に知識階級は國民黨を激勵して三民主義を昂揚してこそ支那は始めて外に對抗し得る力を持つことができるのだといつて公々然唱道してゐる。國民黨が今日全支那を統一し支配する勢力を有するに至つたのも、三民主義を以てその黨是としたためであり、蔣介石が今日のごとき全支那を控制する威望勢力を贏ち得たのも、三民主義を代表する領袖たるが故である。

それ故もしわが國は三民主義は日本としてどうも容認ができないといつたならば、汪兆銘の新中央政府は國民政府の法統を繼承することができないことになるから、おそらく退場するであらう。周佛海は昨年十二月中華日報紙上中央政府の組織に關する論文を掲げ、汪氏の率ゐる同志は、もし日本が條件を實行してくれなかつたなら

ば、全部退場するのみであると述べた。さうなれば時局の收拾は容易にできないことになり、徐道鄰のいつたやうに、まさか支那の廣い面積の最後の一方里までも占領し盡すまでに占領しなければならぬこともないであらうが、三民主義を代表して國民の領袖と稱してゐる蔣介石の抗日政權を徹底的に壊滅するには、前途なほ容易ならぬものがあるやうに思はれる。わが國としてはおそらくあまり遠からざる將來において、到底わが國の東亞新秩序建設の理想と相容れない強大な世界的勢力と正面衝突の覺悟なくしては、この理想を實現し東亞新秩序建設の大業を完遂することはできないであらう。米國はモンロー主義擴大の驕傲な意圖を有しながら、執拗にわが國の東亞新秩序建設に絶對反對の意を表明してゐる。また蘇聯はわが國の滿洲國支持、蒙疆政權扶翼の政策に敢然反對してゐる。或は借款の提供により、或は武器、彈藥、軍需品、將校、技術者等の提供により、直接間接に重慶政府を援助し、わが國の消耗戰を飽くまで長引かしめ、みづから戰亂の渦中に投ぜずして専ら國力を培養し、眈々として乗すべき機會を窺つてゐるやうである。わが國は數年乃至數十年の後に差迫つてゐるインミニメントな危險に直面してゐるから、支那とはしてしなき戰爭などにかゝはり、いたづらに國力の消耗損傷を續けてゐるべき時でない。支那に對して東亞新秩序建設の任務分擔を要求してゐるのもこれがためである。それはわが國の國力を消耗するのみならず、支那にもその創痍を恢復すべき餘力を消盡せしめ、日支共に盡に歸せしむることは、大いに戒めなければならぬ。強い日本と強い支那との協力提携こそは東亞新秩序の完遂を期し得る所以である。日支兩國の一方が弱くなつてもそれだけ東亞の新秩序を妨害せんとする勢力に對する地位は弱くなるわけであるから、兩方が共に傷つき共に弱くなつては、東亞の新秩序建設は到底望まれぬ。

わが國は新國民政府の獨立自主、自由平等を尊重すべきは論を俟たないとして、國民政府の法統を繼承せしめ全支那の人心を收攬せしむるために、三民主義を容認することも、わが國としてなにかの修正を加ふることによつてできることならばもとより辭すべきではあるまい。

## 八

孫文の三民主義諸講説中、わが國を詰難してゐるやうな部分は修正ができないか。もしそれが孫文の三民主義の學説の本質的な部分であり、基本的の原則であるならば、修正はできないはずである。それを修正すれば三民主義を否定することになるからである。しかしわが國を詰難してゐる部分は決して三民主義學説の本質的な部分ではない。基本的原則ではない。三民主義は孫文が劈頭に述べてゐるやうに、救國主義である。支那をその半殖民地状態、孫文の所謂亞殖民地の状態から救ふためには、これを救ふことに助力する國は、いづれの國でも支那の友邦であるといふ考へから、米國よし、蘇聯よしといふのであるから、もし日本に抵抗すれば、支那は救國どころか、亡國の外なく、これに反し、日本の善鄰友好の盟邦となり、その東亞新秩序建設の責任分擔の要求に應ずれば、半殖民地、亞殖民地の状態から救出され、日本と共存共榮の實が得られるとすれば、三民主義の根本原則たる救國主義から、わが國を詰難してゐる部分を修正したところで、三民主義の本質を害することにならないのみならず、かへつて修正しなければならないことになるはずである。殊にわが國に對する詰難は大部分日支兩國の東亞における地位を正しく理解することができなかつたために出でた不當の詰難であるにおいては、なほ更のことであらう。

## 九

一月二十五日重慶政府が香港大公報紙上、支那の承諾し得る和平條件として發表した六ヶ條の條件は、新國民政府を竊地に陥れ、その成立を妨害せんとする意圖から計畫的に案出されたものであることは明かで、第一、絶對に支那の領土主權を保持し、滿洲は勿論、十七年前（西曆一九二三年）すでに租借期限の滿了せる旅順大連も支那の主權下に恢復しなければならぬ、第二、日清戰後の下ノ關係約以來の日支間の一切の不平等條約を廢棄しなければならぬ、第三、外國資本の投資は歡迎するが、日本だけに特別の優遇を與ふことはできない、第四、新通商條約を結び、日本人の治外法權を撤廢しなければならぬ、第五、臺灣、朝鮮は民族自決主義によつて歸屬を定めなければならぬ、第六、亞細亞民族の自由平等を獲得するため、支那は國際會議において日本と提携奮闘すべしといふやうな誰にも不可能なことがわかつてゐるやうなことをならべてゐるのである。重慶政府は今後もおそらく新國民政府に對して妨害を試み、極力その發展を阻害するためあらゆる手段を弄することは明かである。昭和十年徐道鄰が日本は敵か友かといふ論文を發表した當時、今新國民政府の重要な地位を占めてゐる某要人は二條の對日路線といふ論文を發表し、徐氏は日本は誠意を以て日支間の懸案の解決に乘出して來れば、支那は日本に對してたゞ土地侵略の放棄と、東北四省すなはち滿洲の返還とを要求すべきで、その他の方式には拘泥の要なし、過去の懸案は誠意を以て相互に有利に解決し、外交上の障礙を一掃すべしといつて、日本が滿洲を返還しさえすれば、他の條件は協議によつていかやうにも協定ができるやうに考へてゐるが、滿洲の返還などは夢だ、日本はその國民が血を流して得たる權益を保持することに對しては、官民一致舉國一致してゐると述べながら、この要人はその論文の最後において、滿洲國の不承認は中國の政府と人民とが協力一致して確守する鐵則

で、この鐵則に背反し、或は形式的にも事實上にも滿洲を承認するがとき嫌疑あることは絶対に交渉の餘地がない、自分は敢て日本人に告げるが、中國國民黨黨治下の中國は決して再び袁世凱の二の舞を演じ、變形的二十一條に調印するごときことも、第二の朝鮮となり、變形的「亡韓」議定書に調印するごときこともしない、日本もまたかゝる誘惑的な手をさしのべるべきでない、中國がもし日本の協力を求めるならば、いかなる方面においても、第一に中國の必ず自主であること、第二に中國全國民の必要といふことを前提とすると論じたことは想起される。今この論者は和平建國を標榜する新國民政府の樞機に參し、滿洲國の承認を新政府成立の必要條件として反對を撤回したやうであるが、その苦衷は實に察せらるゝのである。

新國民政府の今後の問題はそれが重慶政府の内部に影響を及ぼし、その支配下に残つてゐる地域の人民を動かす、その人心を把握し、新政府に歸向せしむることができるかできないかといふことに懸つてゐる。すなはち發展性如何の問題は、新國民政府の最も重大の問題で、ほとんど生命の問題といつてもよいほど重大な問題である。さなきだに新國民政府の成立によつて漸次窮地に陥らんとする蔣介石のものがきといはうか、あがきといはうか、新政府に對して日本の傀儡政府だとか、偽政府だとか、賣國だとか、漢奸だとか、あらゆる譏詈罵詈を放つてゐるのであるから、わが國としては飽くまで近衛聲明を文字通りまた精神を裏ぎらないやうに實行し、寸毫もその線外に逸脱しないやうにしてこれを扶掖しなければならぬ。それによつて新國民政府は名實共に支那の統一政權となる發展性を持ち得ることとなり、さうしてそれによつて眞の日支兩國の善隣友好の關係が樹立され、東亞新秩序建設の道德的基礎が確立さるゝことになつたならば、これは區々たる少しばかりの權利や利益などには換え難き一大收穫でないか。東亞新秩序の理想の實現は實にこれに懸つてゐる。